

津軽 照子（つがる・てるこ）

1、プロフィール

歌人。華族の家に生まれ、津軽英麿伯爵に嫁いたが、死別後歌作に励む。最初竹柏会に拠り定型の短歌を作るが、後には「短歌表現」で口語・自由律の新短歌運動に尽力した。

<生没>

1887(明治 20)年2月5日 ~ 1972(昭和 47)年 11 月 28 日

<代表作>

歌集『野の道』『花の忌日』『風につたへる』

<青森との関わり>

夫が津軽家第 12 代藩主承昭の養嗣子津軽英麿伯爵。県出身文化人との交流が深い。

2、作家解説

東京都河田町に、伯爵小笠原忠忱の長女として生まれる。幼少女時代は華族のお姫様として深窓の中に育つ。華族女学校卒業後に女子学習院に入学するが途中で退学。20 歳で津軽英麿と結婚するが 32 歳の時に死別、短歌に手を染め佐々木信綱に学び、「心の花」同人として活躍、大正 13 年に竹柏会より歌集『野の道』を出版した。その後昭和5年口語歌人兎山敬一主宰の「短歌表現」に主要同人として参加、同誌の志向する新芸術派短歌の実作者となり歌風は一変した。7 年、歌集『秋・現実』を刊行、二行詩風の歌が収められている。10 年、随筆集『あづまにしき絵』を刊行、大正 12 年から昭和 10 年まで種々の雑誌に掲載した文章をまとめたものである。以後 12 年『手かがみ』、17 年『うら紙草子』等の文集も発行、『うら紙草子』は秋田雨雀の世話で刊行したもので「雪ぐに」という一文は弘前の冬の生活を描いたもの。11 年には歌集『雪にのこる』、18 年には歌集『花の忌日』を刊行。

戦後は「文芸心」に拠り歌作、32年『風につたへる』を出版、口語・自由律の新短歌運動を推進した。

3、資料紹介

○『花の忌日』

図書

1943(昭和18)年9月15日

215mm×160mm

第三歌集。昭和5年、児山敬一の「短歌表現」に拠り、口語・自由律の新短歌運動を行うが、この歌集には昭和8年から18年までの歌1032首を収める。児山敬一は、はしがきのなかで「清みの文学である」と述べている。